

『社会科教育』一九四七年（社会科教育研究会）

参考書としての社会科教科書

— 社会科教科書を読んで —

中央教育研究所員 矢口 新



「国

一

こんど文部省から社会科の教科書が出た。社会科の教科書は一体どんなものとしてあるべきであろうか。社会科は児童生徒が自分で自分の問題を探求し解決してゆくという学習方式をとらなくてはならないと言われている。生徒は自分の周囲に様々の課題を発見するであろう。これらの社会関係としての意義を自分で考えて行くのが社会学習であろう。そういう学習ならば、生徒のなすべき事は自分の眼前に置かれた現実の課題に自ら探求の目をさしむけなくてはならない。現実には生起しつつある課題はそれぞれその児童生徒が置かれている環境によって異なるのである。従ってそれへの探究の仕方もまたそれぞれ異なるのは言うまでもない。それが日本全国一様な社会科の学習が成立しない根拠である。

一様に行うことが出来ないのは余りにも分り切った事である。こんどつくられた社会科の教科書もそういうためのものとしてあるのではない事は当然であろう。小学校の教科書『村の子ども』の巻末にもそれが明瞭に指摘してある。「従来の教科書のように考えてはならない。従ってこの本に書いてあることを順々に説明したり暗記させたりしてはこまる」と言っているのがそれである。それでは社会科学習が成立たないから困るのである。所がその困る教科書学習をはじめている先生方が居るから益々困るのである。教科書というものは順々に説明するというやり方ではなく、使えないものだと考えているらしいのである。いやそもそも学習はそういう教科書学習をしか考えられないのである。全く困るという外はない。

けれども、新しい使い方が出来るためには

そういう風につくられていなくてはならないのである。では社会科学習の際、教科書は一体どの様に使われるものであろうか。児童が現実をみて課題を解決するには見方を身につけていなくてはならないのである。むしろ現実を見つつ見方も身につけてゆくのである。社会の実践的理解はこうしてはじめて自分のものとなるのである。それは現実にある人間生活の様々な表現を通じて行われる。自己の課題を解決しようとして現実をみる場合には今迄見て来た人間の見方を使うのである。それはそれぞれの現実からそれぞれの仕方で理解をつみあげて来た結果である。そういうものを参考にしながら自分は自分の現実を理解してゆくのである。これが参考書によって調べるということの意義である。そういうものがふんだんにあればある程、児童生徒は見方を見につけ易いであろう。こんどの教科書がそういう参考書として書かれていることは「村の子ども」のあとがきを見ても明白である。こういう意味の参考書は現在殆んどないのである。

児童生徒の使う参考書が大人の百科全書であつたり、むずかしい単行本であつたりするのは見るにしのびないのである。子供が自分の周囲の現実をみるに自ら参考とし得るような子供の世界で書かれた参考書がある

ならばどんなにか役立つことであろう。そういう参考書としての教科書があればある程よい。

そういう参考書はどういう性格をもったものであろうか。子供が自分で参考にするのであるから、自分で読めなくてはならない。自分の世界の事につながりをもつて書かれたものでなくてはならない。大人の世界のことであったり、単に知識が体系的に述べられているものでは困るのである。まして先生に説明してもらわなくてはわからない様な昔の教科書風のものでは参考書とはならないのである。社会科の教科書とはならないといわねばならぬ。

そういう社会科学学習の教科書として、こんどの文部省の教科書は十分にその役割を果たすものとなっているであろうか、遺憾ながら十分そういうものとして成功をおさめているとは言えないのである。

二

「三郎君もいよいよ五年生になりました。急ににいさんになったような気がして得意です」という書き出しで三郎君の生活がはじまるのである。村の子供三郎君の生活が展開されるわけである。これからどんな生活がくりひろげられるのかと読むものは期待をも

つのである。

それが「委員会」「さまざまな協力」と読み進んでゆくとこれはと小首をかしげたくなるのである。だんだん生きた三郎君の影がうすくなるのである。さまざまな協力も「田うえ」「田うえ時」のあたりはまだ子供の世界にあるような気がする。ところが「大昔の狩」「昔の漁業、今の漁業」となってくると、言葉遣いこそかわらないがもう全くはじめの書き出しとは縁がなくなる。

四の「誕生日」はまた三郎君が出て来るから子供の世界にもどるのかと思うと今度は学校や兄さん姉さんの会話の形でなががたとお説教がくりひろげられるのである。

夏休みの計画の中味は養蚕の話、村の問題に関する兄さんの説明、六の夕御飯のあとの中味はラジオ、新聞の役割の説明と、この所ずっと解説がつづくのである。「町からの手紙」は三郎君の所へ来たおじさんの手紙の紹介で中味は一寸味のあるもの、信一君との手紙のやりとりが次に出て来る。これは三郎の手紙は三郎の生活記録の形をとり、信一の手紙はそれの解説でなくてもよいもの、新聞やラジオのなかった時代はそのままの中味で、その時代の説明である。

巻末の教師及び父兄の方への三に、児童たちは恐らく一氣にこの本を読んでしまうだ

ろうとあるが果たしてそうだろうか。私は正直の所この本を読むのに苦勞をしたのである。相当がまんをしなければ一冊読み通せないのである。とても一息どころではない。私にはそう面白くて一息に読む程のものとは思えないのである。またかなりむずかしく特に説明調になっている所は相当の所があると思ったのである。

前に出た地理や歴史の教科書に比べて、相当やわらかくなっている事は確かである。だがそれでもどうしてこう日本人は説明好きかと言いたくなるのである。例えばさまざまな協力の所で、大昔の狩は「大昔の人々は、自分が住んでいる土地に生えている植物の芽や、くき、葉、根、実などを取り、自分よりも力の弱いあまりすばしこくない動物をとらえて、食物にしてみました」という書き出しで説明されている。こういった説明がどうも気にかかるのである。道具の説明の所で「人々は動物をうまくつかまえるために、いろいろなくふうをこらしました。はじめはただ手でとらえたり、手ごろな石や木ぎれを使って、これをなげつけたり、ついたりさしたりしていましたが、やがて石にさいくを加えて、ねらいやすいようにつくることをはじめました」と簡単に説明されているが、これは知識の世界の事である。そう簡単に人間の

知恵の発展がゆくものでない。現実の生活のすがた（素型）が描かれるとしたら、こう簡単にはゆかないのである。この説明が若し昔の三郎君でも進君でも或はそのおじさんでも登場人物にして物語られるという形をとったら、本当に大昔の狩の姿が出たであろう。そうなった時はここに説明された程の知識を物語として展開するには相当の頁数があるかもしれない。物語ではそう簡単にあらゆる知識は記述し得ないからである。

併し社会科は物知りになる教育ではない。現実の人間のすがたが描かれて子供がそこから世の中を学びとる、真実を汲みとることが本当の学習である。徒らに知識を与えるより、その現実の世の中のすがたが描かれていることが大切ではないだろうか。

「誕生日」や「夏休みの計画」のお説教に至ってはとくにそうである。「ひまをつくるのにはどうすればよいでしょうか」などと子供にいわせて世帯じみた姉のお説教をきかせるより、実際に人物が活躍してこうしてやと暇が出来ましたという物語でもくりひろげてくれた方がはるかに面白いであろうし為にもなる。村の問題もそうあらゆる所に問題があるといわないで、一つの問題でもよいから「みんなでこうして解決しました」とか「とうとううまくゆきませんでした」とい

う話の方が面白いのである。後の問題の所でこれに似た様な村の問題をさがして解決するにはどうしたらよいか皆で考えましようという様にはいかないものであろうか。

あまりいろいろの知識を与えようとするのが従来の教科書癖に陥っているのである。従来の教科書は先生が教えなければ生徒は自分で読めなかったのであるが、こんどの教科書もそういう所が多いのである。覚える所のない教科書、やさしく子供の世界で物語りが展開されていて、しかも考えさせるような教科書をつくらなくては本当に参考書のよな教科書にならないのである。暗記させては困るような教科書をつくらないで暗記できなくて困る教科書をつくってもらいたいものである。

文部者の教科書が一種きりしか出ていないということは、それでなんでもかんでも一切用を足そうということになり勝ちである。そうするとあらゆる知識をもちこみたい等と考えるようになるのである。それは知識早わかり式の教科書の出来る基である。その意味でも早く国定制度が廃されて、いろんな教科書が出来、一学級の生徒でもいろいろな異なった教科書を使って自分の学習をすすめることが出来、またいろいろな教科書を何種類も使って学習をするような形になりたいも

のである。

三

「土地と人間」は六年生が使う社会科の教科書である。これは一見して地理の教科書とどれ位差異があるかと考えさせるような教科書である。一地図をながめて、二川ぞいの土地、三台地のひろがる地方、四山にかこまれている土地、五山の地方、六海べりの土地と沖あいの島という目次になっているが、これだけ見ると明らかに従来の地理の教科書のくみかえをしたものではないかと思いたくなる様なものである。

その異なる所は、更に目次を細く見るとはっきりする。川ぞいの土地の中は、大阪平野には昔から今日のように人がたくさん住んでいたかという歴史が入っているのである。どの章にもこういった歴史が入っているのであって、その土地にどうして人間が住むようになったかの歴史が述べられているのである。これは地理と歴史の総合教科書であるといえ成程とうなずかれるようなものなのである。

これは六年の社会科の教科書であるという風に考えてはいけないものである。それはあとがきにもある様に範囲からいっても深

さからいっても偏しているのである。六年の社会科の教科書がこれで以て終れりというのではないのである。一種類の教科書として考えなくてはならない。その上でこの教科書に注文することもあるうしほめる所もある。これで六年の社会科の一切用が足りると考えたなら見当違いになるのである。

ということは社会学習が本来教科書によるものでなく、教師と生徒の協力のプログラムによってなされるものだということを認めての事である。そしてこの土地の人間はその場合の或る学習の参考書となるということである。こういう時にこの教科書はどんな参考書としての役割を果すであろうか。

ここでは土地と人間との関係の説明がなされているのである。台地の広がる地方という所をみると、つぎに関東平野のことを調べてみましょうとなつて、関東の台地はどんな特色をもっているかという所では稲のつくれない台地、飲料水の得にくい台地という項目で自然的条件が書かれてある。次はこの台地を人々はどうのようにしてかいこんしたかの題で、台地のかいこんの石器時代以来江戸時代までのかいこんの歴史がのべられている。つづいて台地に育つ桑、農家のようすとして台地を利用する仕方の出来て来た事が説明されている。なぜ関東平野に人々がたく

さん住むようになったかという所では、関東平野の低地の項で土地の条件、江戸の発達の項で江戸の歴史、東京のありさまで明治以後特に現在の東京の地理的説明がなされている。

次はその他の台地にはどんな所があるかで静岡県、青森県、十勝平野の事などが順を追つて述べられている。よくよめば整然とした知識をおぼえこむにはもつて来いのものである。

生徒が自分の住んでいる土地について人間との関係を学ぼうとする時この教科書はあまり役に立つまい。この教科書が整然とした知識的体系をもちすぎているからである。帯に短したすきに長しという事があるがこの教科書は丁度それである。自分の土地について考えようとする時、それを見るに必要な参考資料は大してないのである。広く全国に亘つて一般的なことが述べられているからである。余り体系的叙述になりすぎているのである。それかといって曾つての地理教科書のように使うにはもの足りないものであつて、結局ずっと一通り読んで成程そういうものかとうなずく程度のものである。御尤ですという外はない。これは思い切つて社会科の学習に合せるべきであつて、こういう地理的なものならばもつと見方を突込んで、極く一部

の例でよいから土地と人間との関係を精細に描き、見方という事をはつきり出すべきである。でなければうんと図表統計を多くして資料的なものとしての意味をもたせるかである。

社会科の学習が頭の中ではかなり像がはつきりしたけれども実際にやってみるとまだぼんやりしているのと同じように、教科書についての理念は当っているけれども、それを具体化するには旧来の教科書観が強く制約していてどつちつかずの教科書が出来たという所である。簡単にいえば古い教科書の形がのこつているということである。社会科がまだ成立の過渡期にあるということと相応する教科書のすがたを明らかに示している。

四

中学校の教科書は小学校のそれとは非常に趣きが異つてゐる。組み方も横組みで、内容を豊富にするためか活字も小さく読みにくい感がする。今ここにあるのは『世界諸地域の自然と農牧生活』というのである。聞く所によると一学年が六分冊になつてゐるというのであるからこの一冊を以て中学校の社会科教科書の全貌は知る由もない。これで以て軽々に論ずることは堅く戒めねばな

らない。

併し中学校の社会科といえども社会学習の本質には変りあるまい。こういうことはこれには書いてないけれども、教科書は参考書の一種と考えてもらいたいという積りで書いたものと思つて差支えあるまい。まさか六冊を合せて六冊の教科書を以て教科書学習とするのが中学校の社会学習のあり方だとは考えていないのだと思う。そういう積りでこの教科書を見て行きたいと思う。

目次をみると、一 地勢と土地利用、二 氣候と生活、三 アジアの農牧生活、四 食糧の大消費地ヨーロッパと未開拓地の広いアメリカ、五 アメリカの躍進、六 小麦と羊毛のオーストラリアとなつてゐる。はじめの二章は従来の概念でいうと地理通論みたいなものに当るし、それからあとは、農牧を中心とした世界地理である。これは全く地理教科書の改編というか再構成というか、組み方の異つた地理教科書である。

これはまえがきにも述べられてゐるように、世界諸地域の自然条件、人類の生産についての努力、諸地域の農牧生活、農産物、畜産物の交易等の問題に係をもつてゐる参考書と見るべきであらう。だからこれら四つの事柄を考える場合の地理的基礎についての参考書とみることが出来る。

地理的条件を考える参考書として性格をはつきり出すとすれば、それは統計や図表を出来るだけ多く含むべきであらう。その点もこの教科書は多少は考慮をしてゐるようである。しかし根本的な性格は各地域別に氣候風土農牧を平均に述べるといふ従来の地理教科書の形を脱して居らないから、教科書の言う如く四つの事柄について考える場合の参考資料として使えるかどうかは疑問と言わなくてはならない。即ち自然と農牧生活が順々に地域別に記述されてゐるよりはもつと構造を変えて、比較地理学のようにするべきではないだろうか。そうすればもつと詳しく一つの問題について自然と農牧との関係について考え方を述べることができよう。広く通り一ぺんの事を出来上がった知識として述べるよりは、そういう考え方をじっくり見せて、その資料もうんと多くする。他のことについてもこの様に考えてみようではありませんか、それにはこんな参考書を使うことが出来ますというように行けないものだろうか。

この一冊ですべての事にわたらうとするのが、平均にあらゆることを浅くわたって出来上つた知識を押しつけることになるのである。そういう教科書の性格と社会学習の参考書としての性格とは根本的に相容れない

ものである。思い切つて狭く深く我々の生活の問題に合せて考え方を展開するという態度をとらなくては、よい社会科教科書とはなるまい。この点で中学校の教科書も本当に社会学習の性格をのみこんで書かれてゐるとは言えないのである。余りにも旧教科書のな残りがあつすぎるといわなくてはならぬ。

この度の教科書は我が国ではじめて公にされたものである。今後つづいて出される多くの教科書が、更によいものであつてほしいという希望から、愚見を遠慮なくのべたまでである。作るものと、批判するものとは、それぞれ立場が違つてゐるけれども、社会科教科書の性格から見て将来本当によい参考書として役立つものが編修されんことを切望してやまない。

